

女一宮物語の解釈とその評価について

—源氏物語第二部・第三部の主題に関連して—

篠原義彦

(一) 女一宮物語について

源氏物語の第二部と第三部において、今上の帝の皇女で、女一宮と呼ばれる人物が登場する。匂宮と同腹で、母は明石中宮であり、幼時、匂宮とともに紫上の寵の殊に深かった皇女でもあった。この女一宮がはじめて物語に登場するのは「若菜下」であって、その後、見えかくれしつつその姿を見せている。すなわち、「若菜下」三回、「夕霧」一回、「御法」一回、「匂宮」一回、「椎本」一回、「総角」四回、「宿木」一回、「浮舟」二回、「蜻蛉」三回、そして「手習」の四回であって、^(注1)「総角」と「蜻蛉」を除いては、各々二、三行の描写にすぎない人物である。これらの記述から、女一宮についての物語をまとめてみると、大略以下のようなものになる。すなわち、(1)女一宮は明石中宮腹の皇女であり、匂宮とともに、紫上の寵を受け、病床にある紫上はこの宮の将来を常に心配していた、(2)紫上や源氏の死後も六条院の雨の対に住んでいた、(3)匂宮は在五物語に託して女一宮に歌を詠みかけたことがあつ

たし、宮に集まる侍女に関心を持っていた、(4)薫は宇治の中君や明石中宮を見るにつけ、女一宮を連想していた、(5)明石中宮法華八講の日、女一宮を垣間見、その美しさに動揺した薫は妻の女二宮（女一宮の異腹の妹）に姉宮と同じ羅の単を着せ、かつ文通をすすめた、(6)蜻蛉式部卿宮の姫君が宮の君という呼び名で女一宮に出仕した、(7)女一宮は物の怪に病み、その調伏のため横川僧都が下山し、その際浮舟は出家した、(8)浮舟出家の話が横川僧都から明石中宮へて薫へと伝えられた——このような話を背負って登場する女一宮についての物語（以後女一宮物語と呼ぶ）を大きく取り上げ、宇治十帖^(注2)の構想との関連において把握しようとしたのが、小山敦子氏と藤村潔氏であつたし、また、これらの説に反論しつつ、「冷泉院女一宮物語」の説を提唱したのが吉岡曠氏であつた。^(注4)

(二) 女一宮物語と夢浮橋中絶説について

「蜻蛉」の巻は浮舟入水の後の母の悲嘆と匂宮、薫の浮舟追慕の心情が描かれ、その後半において、秋山虔氏が「収拾緩和的中だる

み」と評された(注5)、女一宮を中心とする、宮廷絵巻でも呼ぶにふさわしい場面が登場する。薫は、女房たちとたわむれつつ氷をもてあそぶ女一宮を垣間見、妻女二宮に姉宮と同じうすものを着せ、かつ文通をすすめ、匂宮は匂宮で、浮舟の死からやがて解放され、日ごろの「すき」にもどって、蜻蛉式部卿宮の姫君で、女一宮に出仕した宮の君に、「いつしか御心かけ給」(蜻蛉七一四一、日本古典全書「源氏物語」以下同書より引用)ふありさまである。浮舟への鎮魂歌は奏でられ、薫・匂宮ともに、宮廷を中心とする「場」において、おのが思いのままにふるまっている。すなわち「蜻蛉」の巻は、その前半は浮舟への鎮魂歌であって、そして、後半は女一宮物語とでも言うべき構成になっているが、小山氏はこの両者を比較して、「蜻蛉巻で始まる女一宮物語の新しい構想が主であり、これはどこまでも発展する可能性をはらんでいるのに対し、入水後の浮舟物語は従であり、もはや発展を予想させる何者もない」とされ(注6)、「蜻蛉」の巻の中たるみを浮舟生存を薫に伝えるための用意周到な径路設定であったとする高橋和夫氏の説を退けつつ、女一宮物語の宇治十帖における重要性を強調しておられる。すなわち、小山氏は、作者は「蜻蛉」の巻において浮舟後日譚に決着をつけ、女一宮という紫上の継承者を中心とする(注8)、「最高の貴族的・宮廷的生活環境、そこを舞台とする野心的な物語」を書こうとしており、それが姿を現わしたのが「蜻蛉」後半の宮廷恋愛の場であるとされている。そして、女一宮を中心とする野心的な物語という作者の構想

橋姫物語の後半に相当する部分が延長されて浮舟物語となった、このような過程を経て、現在の源氏物語第三部は成立したとされている(注10)。小山氏が現在見られる女一宮に関する記述から、書かれるはずであった源氏物語を推定され、女一宮物語をその萌芽であり、いわば氷山の一角とされるのに対し、藤村氏は、かつての作者の持っていた構想の浅薄であるとされる点に特色があると言えよう。女一宮物語は果して夢浮橋中絶を暗示するものか、また、構想の挫折の浅薄なのか、あるいはそれ以外の把握は不可能であるのか、検討すべきところであろう。

四 女一宮と紫上

「若菜上」の巻以後、紫上の地位は急速に下降して行く。朱雀院最愛の女三宮の降嫁は、それまで曲りなりにも安定と調和を保って来た紫上の心象に暗いかげりをもたらし、それは次第に不安と将来への危機に発展して行く。紫上は、夜がれの床の中で、目の前に崩れ行く、かつての栄光にみちた世界を想い、悲嘆にくれる、そのような紫上の寂寥の心を慰めてくれるものは、明石中宮腹の女一宮の幼な姿であった。子宝に恵まれます、今は源氏にも見はなされた(紫上の心にはそう写った)、天涯孤獨の紫上の心を慰めるものは、女一宮の童心のみであった。

東宮の御さしつぎの女一宮を、こなたに取り分きてかしづき奉り給ふ。その御あつかひになむ、つれづれなる御夜がれの程もなぐ

は、宮廷の後宮を中心とする読者層の圧力のため中絶し、生ける屍浮舟を復活させねばならなかったが、作者の構想の中心は女一宮物語の展開に向けられており、何らかの事情で源氏物語は中絶という事態をむかえたものであるとされ、夢浮橋中絶を提唱せられた。

(三) 女一宮物語の構想とその挫折について

小山氏が宇治十帖の後半を、浮舟物語の決着―女一宮物語の展開―浮舟物語への回帰―夢浮橋中絶という形態において把握されるのに対して、藤村氏は女一宮物語の構想はあくまで構想のまま匂宮巻以前において放棄されたものであり、「蜻蛉」を中心とする女一宮関係の記述は、その構想の残存形態であり、それは「植物の所謂先祖がえりを連想させる」(注9)ものであるとされ、源氏物語第三部の成立過程を次のように推定しておられる。すなわち、(1)源氏物語第二部の物語の進行に平行して、女一宮・匂宮・薫を中心とした源氏薨後の物語の構想がめぐらされていた、(2)源氏物語第二部の物語が完結すると、右の女一宮物語の構想も全く進展しなくなった、(3)女一宮物語の進展を阻害していた結婚の幸福に対する不信感を中心とした、作者の悲観的観念が、女一宮物語の構想とは別個の物語の構想を思いつかせた、(4)前構想である女一宮物語は、全面的に撤回されて、新しい物語の構想を具体化するために、源氏正篇に続く匂宮以下三帖が書かれた、(5)続いて橋姫物語が執筆されたが、橋姫物語の執筆中、宇治の中君をめぐる物語の部分に浮舟を用いる事を思いつき、

さめ給ひける(若菜下四十一三、傍線筆者以下同じ)

このような描写で、女一宮は物語の世界に登場して来る。女一宮は紫上にとって、孤独寂寥の心―それはかつての栄華が比類なきものであっただけに、よけいに紫上の心を傷つけるものであった―をいやしてくれる唯一の存在である。中宮腹の女一宮によって寂寥の心をいやさねばならない紫上の運命は皮肉であった。殆んど理想の女性とでも言うべく創造され、栄光の道を歩んで来た紫上にも、子どもがなかった。その紫上が明石御方の孫娘、女一宮によって慰撫されようとは余りにも皮肉なめぐりあわせでもあった。かつては己が城をおびやかした明石御方の孫娘女一宮と紫上。そこには崩れ行く紫上の栄光の無惨な姿が余すところなく描かれている。そして、病の床にある紫上は女一宮の姿を見て、成人した姿を見ることができない我が身を思い、悲しみにひたるのである。女一宮は紫上の栄光のかけり・衰退の中に登場し、紫上の孤独寂寥の心を慰める存在となり、紫上は宮の将来を心配しつつ死んで行く。

女一宮は、六条の院の南のまちの東の対を、そのよの御しつらひあらためずおはしまして、あさゆふに恋ひしのび聞え給ふ。(匂宮五―一三五)

紫上の死後、女一宮は、六条院の東の対をゆずり受け、紫上追慕の日を送っている。それはあたかもかつての紫上の愛情に報いるがごとくであった。死は追慕されることによって美化される。紫上の死は女一宮の追慕の姿によって光彩を放つものとなった。女一宮は源

氏薨後の物語を、それ以前の物語に結びつける役割を背負った人物でもあった。

「若菜下」以後「匂宮」までの女一宮に関する記述（それは物語という名で呼ぶ程の質と量とを備えたものではない）は紫上の孤独寂寥の心をいやす存在として登場し、紫上の死後は紫上追慕の具として存在している。そして、女一宮によって心をいやさねばならなかった紫上の運命は、作者の深い慟哭の具象であったし、それは紫式部が抱いていた女性の結婚への悲観的な把握の具象でもあった。結婚によって幸福を掌中のもとするものはだれひとりとしていないという作者の前提を浮き彫りにするためにこそ、女一宮は必要であった。

(四) 女一宮と薫

「若菜下」―「匂宮」における女一宮の記述が、紫上との関係において把握されるものであったのに対し、「権本」―「蜻蛉」間の女一宮に関する記述ないし描写は薫との関係において理解されるものである。この「権本」―「蜻蛉」の巻において、薫は宇治の屋形で中君を垣間見て、女一宮を連想し（権本）、続いて明石中宮を見て、同じく女一宮を思い（総角）、女一宮の女房である小宰相に関心を示し（蜻蛉）、そして、明石中宮の法華八講における女一宮の垣間見が描かれているし、一方、匂宮は匂宮で、「総角」の巻において、在五物語に託して女一宮に対して「若草のね見むものとは思はねど

むすばれたるここちこそすれ」（六一八二）と詠みかけ、明石中宮が中君を二条院に移すことをすすめたのに対して、女一宮の侍女としての処遇なのかと疑ったりしている。このように、「権本」―「蜻蛉」における女一宮の記述ないし描写は薫と匂宮両者に関連はしているものの、その中心は薫との関係であるし、その点で、この間の女一宮物語を薫との関係において把握することは許されるであろう。

(注11)

ところで、吉岡曠氏も既に指摘されたように、宇治十帖においては、薫と匂宮という二人の人物の性格が非常に重要な役割を果たしている。そして、薫と匂宮という二人の性格との関連において、多くの人物の運命が決定して行ったという感じが強い。薫と匂宮とは宇治十帖を貫く大きな縦糸であり、この縦糸と交錯する横糸―それは大君であり、中君であり、そして浮舟であった―の織りなした綾が宇治十帖でもあった。そして、作者は薫と匂宮の性格的対比と、その具象化に極度なまでに心を労したという感じが濃厚である。

薫と匂宮とは常に対比され、対照的に造型されており、それは第一部における源氏と頭中将、第二部における夕霧と柏木の造型を経て、作者がたどりついた男性人物造型の帰結でもあった。

ところで、篤実で反世俗的志向を具えた「まめ人」薫の愛は消極的で非行動的であった。そして、常にそれは観念の世界で青白く燃え、連想による代償を求めて行く愛でもあった。^(注12) 薫は大君を愛したが、大君は薫を残して死んだ。その後、薫は中君、そして「人形」

の女浮舟へと、ゆかりを求めてさまようが、中君、浮舟を見る薫は、それらの女性の背後に、常に大君を連想し、大君を追慕し、そして、大君のゆかりの人として愛している。浮舟の登場は、薫のよこしまな恋慕を断ち切ろうとする中君の思いと、薫の「昔覚ゆる人形」（宿木六一―一九三）を求める心とが交叉する時点において可能であった。薫の愛は連想による代償への傾斜という点で特異でもあった。そして、「権本」「総角」の巻において、作者はこのような薫の愛の姿を示すものとして女一宮を登場せしめたのではなからうか。また、このような薫の愛のあり方が更に典型的に示されるのが、「蜻蛉」における女一宮の垣間見であった。侍女たちが氷を持ってたわむれるのを眺める女一宮を垣間見た薫は、その美しさに心の動揺をおぼえる。そして、妻女二宮に同じ羅の単を着せ、氷を取り寄せ、かつ、女一宮との文通をすすめる。ここには常に消極的で非行動的で、観念の世界での遊戯に終始する薫の愛がくりかえされている。それは宇治の里で見せた薫の愛の二番煎じでもあった。女二宮に女一宮と同じ装いをさせることによって、女一宮を想う心の代償とし、女二宮から女一宮を連想する。ここには、薫の愛における発想様式がくりかえし示されている。そして、「橋姫」や「権本」における宇治の姫君の垣間見がそうであったように、「蜻蛉」における垣間見も、薫の道心をその根底からゆるがし、下降させるものでもあった。すなわち、女一宮を見た時の薫の心情が次のように描かれている点は注目すべきであろう。

まだいとちひさくおはしましし程に、われも、ものの心を知らで見たてまつりし時、めでたの兒の御さまや、と見たてまつりし、そののち、たえてこの御けはひをだに聞かざりつるものを、いかなる神佛の、かかる折見せ給へるならむ、例の安からず思はせむ、とするにやあらむ、と、かつはしづ心なくて、まもり立ちたるに（中略）……かの人は、やうやう聖なりし心を、ひとみ世をそむきなましかば、今は深き山に住み果てて、かく心乱らまじや、など思いつづくるも安からず。などて年ごろ見たてまつらばやと思ひつらむ、なかなか苦しう、かひなかるべきわざにこそ、と思ふ（蜻蛉七一―二一九）

薫は女一宮に乱れゆく自分の心情を思い、宿願を果しえなかつた過去を偲び、大君の一件以来の彷彿する自己の姿に思いをいたしている。薫にとつて女一宮は過去への悔恨のよすがでもあった。女一宮を見ることによって、薫はかつての我が身に思いをはせ、出家得道の志を持ちつつも、大君に執着して行った、おのが心の性を思い続ける。そして、そのような悔恨の中にありながらも、女二宮に姉宮と同じ装いをさせ、文通をすすめるをえない薫―そこには、かつての「まめ人」の境地からははるかに逸脱した、もう一人の薫が存在する。反世俗的志向を持った「まめ人」としての相貌はどこかに消えうせてしまった。変貌した薫の姿は哀れでもあった。そして、その薫の悔恨と哀しみの情は、「ありと見て手にはとられず見れば

またゆくへもしらず消えし蜻蛉」(蜻蛉七―一五〇)という独詠に
集約されるものでもあった。

ところで薫が女一宮に関心を示すのはゆえなきことではなかつた。薫という人物について、作者は「宿木」の巻において次のように評している。

この君は、まだしきに世のおぼえいと過ぎて、思ひあがりたること、こよなくぞものし給ふ(匂宮五―一四一)

このような薫の「思ひあがりたる」心、傲慢で気位の高い人となりは、父柏木の性格を継承したものであった。^(注13) 柏木が落葉宮を妻としつつも、朱雀院最愛の内親王女三宮を求めたと同様に、薫もまた、帝が麗景殿女御腹の女二宮を託そうとしたのに対して、「后腹におはせばしも」(宿木六―一三七)と、明石中宮腹ならざることを不満に思うのであった。薫という人物の形象化には父柏木の性格の影響が濃厚にうかがわれるが、中でも、皇女をめぐる妻えらびにおける気位の高さには、柏木と同様の発想がうかがわれる。柏木が朱雀院最愛の女三宮を求めて得られなかったように、その子薫も明石中宮腹の女一宮を求めて得られなかった。その、かつての薫の屈折した心情が、歪曲した形をとって再び現われたのが「蜻蛉」の巻の女一宮物語であった。充たされぬ思い―それは、薫が常に背負って行かねばならないものでもあった。

薫は大君・中君・浮舟と次々に宇治の三女を愛し、そして、それらをすべてその掌中にしながらも、失って行った。そのような薫

て、近うわたいたてまつるべき事をなむ、たばかり出でたる」ときこえ給へり。後の宮きこしめしつけて、中納言もかくおろかならず思ひほれて居たなるは、げにおしなべて思ひがたうこそは、誰もおぼさるらめ、と、心ぐるしがり給ひて、二条の院の西の対にわたい給うて、時々も通ひ給ふべく、しのびきこえ給ひければ、女の一宮の御方にことよせておぼしなるにや、とおぼしながら、おぼつかかなかるまじきはうれしくて、のたまふなりけり。さななり、と、中納言も聞き給ひて、三条の宮も作りはてて、渡いたてまつらむことを思ひしものを、かの御代りになずらへても見るべかりけるを、など、引きかへし心ぼそし(六―一〇九)

こゝには、匂宮の中君に対する愛情の位置づけ―それは、とりもなおさず中君の位置づけでもあるが―と、薫の愛の姿が描かれている。すなわち、明石中宮の、二条の院へ中君を迎えてはどうかという提案に対して、女一宮の女房としての処遇ではなからうかと案じつつも、氣ままに逢えるのがうれしく、その旨中君に伝える匂宮と、それを聞くにつけても、大君の代償として迎え取ることでもできた中君なのにと、悔恨の念を禁じえない薫とが描かれている。明石中宮にとっては―それは、ひいては匂宮にとっても―中君は所詮は女一宮の侍女としての位置でしかなかった。いかように匂宮の愛が深かろうとも、畢竟女一宮の侍女としての処遇で十分な女性であった。大君・中君・浮舟ともに宇治の里の落魄の女であった。明石中宮・女一宮を中心とする宮廷の華麗なる世界からは遠く離れた存

の愛の彷徨の姿は、既にふれたように「蜻蛉」の巻の独詠に象徴される通りであった。そして、女一宮を見るにつけてもおのが心のかさをくやみ、しかも、その悔恨の中で、救いのない妄想におちいつている。宇治十帖における物語は、このような薫の性格のあやなす系の乱れによって支えられている。薫の性格にあやつられて、多くの人物が動き、物語は創られて行った。薫の性格の織りなす絵巻―それが宇治十帖であった。「まめ人」薫は連想によって、大君の代償を求めつつ、俗の世界へと傾斜して行った。「椎本」から「蜻蛉」に至る女一宮物語は、このような薫の愛の姿と悔恨の心情とを鮮明に映像化するための、いわば第二義的な物語であった。かつて、我が身の出生に疑いをもち、宇治の里に八宮を訪れた薫、常に反世俗的志向にわれとわが身を包み「まめ人」として自他とも許した篤実の人薫の中にひそむもう一人の薫―それを知っていたのは大君と匂宮とであったが―を読者の前にさらけ出し、薫という人物像をありのままに示したのが「蜻蛉」の後半であった。それは篤実さのみでは把握しえない生身の人間の姿であった。どうすることもできない薫の恥部でもあったが、薫はそれゆえに現実性を増した。「椎本」―「蜻蛉」における女一宮物語の意義はそこにあったと言えよう。

また、「総角」の巻で、匂宮と女一宮のたわむれの後に、次のような描写があるのも注目すべきであろう。

かの宮よりは、「なほかう参り来ることもいと難きを、思ひわび

在であった。

われすさまじく思ひなりて棄て置きたらば、かならずかの宮の呼び取り給ひてむ、人のため、のちのいとほしさを、ことにたどりたまふまじ、さやうに思す人こそ、一品の宮の御方に、人二、三人参らせ給ひたなれ、さて出で立ちたらむを見聞かむ、いとほしく、など、なほ棄てがたく、けしき見まほしくて、御文つかはす(浮舟七―七一)

薫は匂宮の心を忖度し、浮舟の処遇を危惧するが、これは「総角」における明石中宮の中君処遇の方針に対応するものであり、中君・浮舟ともに、それだけの存在であったことを明確に物語っている。事実、蜻蛉式部卿宮の姫君は「宮の君などち言ひて、裳ばかりひきかけ給ふぞ、いとあはりなりける」(蜻蛉七―一四〇)というありさまで女一宮のもとに出仕している。薫の懸念は誤りではなかった。

宇治の姫君たちは、明石中宮や匂宮―そして、薫をも含めて―これらの貴顕の人々にとっては、女一宮の侍女としての存在でしかなかった。客観的に見れば、それ以上の何ものでもありえなかった。そのような処遇から彼女らを救いようものは愛のみであったし、それしかありえなかった。そのような落魄の女人、宇治の姫君の失意の姿は女一宮と対比する時、その哀れはより深まる。華麗な宮廷絵巻と対比しつつ、これらの哀れな姫君の運命は描かれた。華麗と対比されて、その哀れは一層深化する。

女一宮と宇治の姫君、余りにも対照的な女性であった。そして、後者は前者に出仕する身でしかありえない。そういう女性の運命にかがずりあわねばならなかった薫、そして、そのような女性との交渉におのが身までを裂かねばならなかった薫、この薫が創造されたところにこそ作者の深い洞察があった。「椎本」から「蜻蛉」に至る女一宮物語は、薫の恋愛における発想様式を確認しつつ、そして、宇治の三女が所詮は女一宮の侍女でしかないことを明らかにしつつ、それにもかかわらず、宇治の姫君にとらわれて行く薫の屈折した心情を描くために存在したとすることが出来る。

六 女一宮と浮舟

「蜻蛉」に続いて「手習」においても女一宮の名は物語に現われる。すなわち、女一宮は物の怪のために病み、明石中宮の懇請により、物の怪調伏のために横川僧都が下山し、その途中小野に立寄り、浮舟の安否をたずねるが、浮舟はそれを機会に出家の意志を僧都に伝え、落飾が行なわれる。そして、浮舟出家の話は横川僧都から明石中宮へと伝わり、続いて小宰相を通じて薫にまで伝えられて行く。「手習」の巻の女一宮の病気に関する記述は、横川僧都の下山を容易ならしめ、正当化するための方便であり、そして、浮舟生存の報が、僧都―明石中宮―小宰相―薫と連続的に伝わって行くための設定でもあった。横川僧都を薫にまで連係せしめるためにも女

一宮は病まねばならなかった。女一宮の病気という異常事態が存在したがゆえに、僧都は山を下り、それによって、浮舟生存の知らせが薫にまで達しえたのであった。すなわち、女一宮の病気という前提があつてこそ、僧都の下山も可能となり、そして、浮舟生存の話が薫に伝わることも可能であった。女一宮の病気はそれらの前提として、条件として用いられているということができよう。

ところで、女一宮物語は既に見てきたように三つの部分から成っているということが出来る。すなわち (1)「若菜下」―「匂宮」における女一宮と薫、そして(2)「手習」における女一宮と浮舟の話である。(1)が薫の孤独寂寥の姿を浮き彫りにするために設定されたものであるとすれば、(2)は落魄の女性宇治の姫君の位置を明確にし、そして、薫の恋愛における発想様式を再確認し、貴顕の身にありながらも落魄の女人にどこまでもかかすりあわねばならなかった薫の心象を鮮明に映像化するものであり、(3)は浮舟生存を薫に伝えるための前提として設定されたものであった。そして、(1)(2)(3)において共通することは、女一宮物語はいずれの場合においても、第一義的な物語たりえず、あるいは浮き彫りにするために、また、あるいは前提ないし条件として存在したということであった。女一宮に関する記述なり描写なりは、薫上との場合においても、薫との場合においても、そして、「手習」の浮舟の場合においても、常に第二義的な存在であり、いわば第一義的な物語を鮮明化する影の部分として存在した

ということ注目すべきであろう。いわば、主題を内包した物語につき従う影として存在したのであった。(1)においては、女一宮は薫上の寂寥の姿と薫上追慕の情の描写に不可欠であったし、(2)においても、薫の歪曲した発想様式を鮮明化するために法華八講の垣間見は必要であったし、女一宮と対比されることによって、宇治の姫君の位置がはじめて明確にされえたり、(3)においても女一宮の病気は不可欠の道具でもあった。

ところで、女一宮ごとき貴顕の姫君を中心とする物語は、既に第一部・第二部で終っていた。「若菜上」から始まる薫上の悲劇は、そのような貴顕の女性を中心とする物語の否定以外の何ものでもありえない。薫上の悲しみとともに崩れ行く源氏の栄華の世界は再び構築されえないものであることは作者の確信でもあった。柏木もそうであったが、夕霧までもが、源氏の世界への反逆者として登場しているし、薫においてはより深刻であった。宮廷貴顕の場を中心とする華麗な世界は捨て去られ、拒否せられた。薫上のような理想の女性を中心とする恋愛絵巻が成立する前提は存在しえない―これこそ第二部の物語の自壊作用の中で作者が雄弁に物語った結論ではなかったか。そのような源氏―薫上の世界の崩壊の上に立脚して、宇治十帖の世界は構築された。作者にとって、一度崩壊した世界を再び構築することは不可能であつたし、ありえないことであつた。作者の構想は自然の勢いとして、源氏―薫上の世界とは異なった世界に赴いた。それは、薫上の貴顕の女性、女一宮にとっては侍女として

の存在でしかありえない宇治の姫君の住む世界に、貴顕の人匂宮・薫を置いてみることであった。小山氏は「光源氏―匂宮・薫」・「薫上―X」という関係、系譜を想定し、「このXに該当する女性是谁であろうか。宇治の姫君ではないのだ。匂宮・薫という主人公に対応して、薫上の理想像、地位と高貴性と美と聡明とを充足した女性の継承者たるべきものは、実はこの女一宮である」とされている(注15)。Xに女一宮が挿入されえなかったところにこそ、この物語の作者の鋭い創造力と深い認識とがあつた。そして、Xに該当する資質と地位とをもちあわせない宇治の三女―特に浮舟の場合はそれが顕著である―を挿入したところに、作者の深い慟哭があつた。それが第二部の薫上の孤独寂寥の姿から得られる解答でもあつた。女一宮は、物語の中で、充分その役割を果たし、浮舟生存を薫に知らせ、物語の世界から消えて行く。

七 女一宮物語の解釈とその評価

女一宮物語は小山氏が説くところの夢浮橋中絶を暗示するものでなければ、藤村氏の言うような、原初構想の挫折の浅薄でもなかった。それは宇治十帖の世界を構築するための前提であり、条件であり、その意味において、第二義的な物語であつた。「若菜下」―「匂宮」においては、女一宮物語は薫上の孤独と悲しみとをより深く刻むためのものであつたし、「椎本」―「蜻蛉」では彷徨する薫

の愛を浮き彫りにするとともに、宇治の姫君たちを明確に位置づけるために必要であったし、「手習」においては、浮舟出家の要因ともなり、浮舟生存の報が明石中宮や薫に伝わるための条件でもあった。このように、女一宮物語は常に宇治十帖の主流を助ける存在として位置している。そういう意味において宇治十帖の世界にかかわりあいをもっている。それだけのことであったし、それで充分でもあった。女一宮物語は宇治十帖の物語を浮き彫りにするために存在したのであったし、それが作者の明確な意図でもあった。第二部を書いた作者の確信でもあった。紫上の世界の崩壊の後において、女一宮物語の展開される必然性は全く存在しなかった。それは構想の挫折の浅滓ではなかった。貴頭の女一宮を物語の中心にすえるということは作者の脳裡には存在しなかった。もし、女一宮物語の構想―藤村氏のいわれるような内容の―を作者が用意していたとすれば、「野分」以後の夕霧や、第二部における柏木や女三宮の源氏―紫上の世界への挑戦と侵蝕は無意味なものとなってしまふ。紫上の世界のくずれ行く姿を慟哭ととも描いた作者が再びその継承者を中心とする世界を構築するはずはなかった。女一宮物語は書かれるはずの物語の冰山の一角でもなければ、挫折した原初構想の浅滓でもなかった。薫そして匂宮をめぐる物語を京都の貴頭の場に展開することは不可能であった。それが作者の結論でもあり、確信でもあった。作者の脳裡にはただひたすら宇治があった。そして、その宇治を浮き彫りにする意味においてのみ、女一宮物語は存在しえたとはい

うことができる。

注1 池田龜鑑博士編「源氏物語事典」(東京堂)の「作中人物解説」による。

注2 小山敦子氏「女一宮物語と浮舟物語―源氏物語成立論序説」『国語と国文学』昭和三十四年五月号

注3 藤村潔氏「源氏物語の挫折―女一宮物語の構想と宇治の物語との関係―」『国語と国文学』昭和三十七年三月号

注4 吉岡曠氏「宇治十帖の構想」『国語と国文学』昭和四十一年一月号

注5 秋山虔氏「浮舟をめぐる試論」『国語と国文学』昭和二十七年三月号

注6 注2に同じ

注7 高橋和夫氏「宇治十帖の構成技法について」『国語と国文学』昭和二十七年十二月号

注8 注2に同じ

注9 注3に同じ

注10 注3に同じ

注11 注4に同じ

注12 拙稿「源氏物語宇治十帖考究―浮舟の愛と死と道―」『土佐の教育』昭和四十年十月

注13 拙稿「薫の造型と夕霧・柏木」『日本文学研究』昭和四十五年(第七号)

注14 拙稿「源氏物語における人物造型の系譜について」『解釈学会「解釈」昭和四十五年一月号

注15 注2に同じ